感情共有の期待感に関する検討

○田中知恵・齋木彩

(明治学院大学大学院心理学研究科)

キーワード: 感情共有 期待感 コミュニケーション

Examination of expectancies for affective sharing

Tomoe TANAKA, Aya SAIKI

(Graduate School of Psychology, Meiji Gakuin University)

Key Words: affect sharing, expectancies, communication

問 題

個人間過程における感情の役割について検討した研究では、コミュニケーションの送り手が他者と感情を伴う情報を共有しようとする事が示されている (e.g., Christophe & Rimé, 1997)。しかしながら、送り手は常に伝達内容に対する感情を表出し、その感情が受け手に共有されることを望むわけではないだろう。たとえば、受け手との感情経験の共通性に対する知覚や、受け手に対する感情共有の期待感（自分の感情が受け手に共有されるという期待）によって、送り手の感情表出は影響を受ける可能性がある。

本研究では、感情共有の期待感の測度を作成するため調査を実施する。その際、喜びや怒りなど特定の情動についてではなく、“感じ方”や“気持ち”の共有に対する期待感を参加者にたずねることとする。また感情共有の期待感と自尊感情や他者意識との関連についても検討する。

方 法

調査参加者 関東の大学生 150 名 (男性 61 名 女性 88 名 不明 1 名)。平均年齢は 20.63 歳 ($SD=0.95$) であった。

手続き “大学生の意識や行動に関する調査”への参加に對して了承を得た後、質問紙を配布し回収した。

質問項目の構成 個人属性、感情共有の期待感 10 項目、自尊感情尺度 10 項目 (山本・松井・山成, 1982)、他者意識尺度 15 項目 (辻, 1993)、質問紙には他にも多数の項目が含まれていたが、本稿の目的とは関連がないため割愛する。

感情共有の期待感 まず参加者に以下の教示文を呈示した。“あなたが、日常生活において他の人と話をするときについてうかがいます。以下の項目は、あなたの考えにどの程度あてはまりますか。1~7 の数字のどれかひとつに○をつけてお答えください”。教示文呈示の後、“相手は私と話をするとき、”という文章に続けて、“私の感じ方と同じ感じ方をするだろう”“私の気持ちを共有するだろう”“私の気分と同じ気分を経験するのは難しいだろう (逆転)”など 10 項目に対し、1 (全くあてはまらない) から 7 (非常によくあてはまる) の 7 件法で回答を求めた。

結 果

感情共有の期待感 感情共有の期待感についてたずねた 10 項目の内的整合性が確認された ($\alpha=.87$)。

自尊感情との関連 感情共有の期待感 10 項目の合計得点 (感情共有の期待感得点) と、自尊感情 10 項目 ($\alpha=.90$) の合計得点には弱い負の相関が認められた ($r=-.20, p<.05$)。

他者意識との関連 他者意識についてたずねた 15 項目は、内的他者意識に関する 7 項目、外的他者意識に関する 4 項目、空想的他者意識に関する 4 項目により構成されていた。この構成について確認するため因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を実施したところ、想定される 3 因子が抽出された。各因子の項目の得点を合計し、感情共有の期待感得点との相関を算出した。その結果、感情共有の期待感得点と内的他者意識得点、また空想的他者意識得点の間には有意な相関が認められず ($rs=.06, ns$)、外的他者意識得点との間には弱い正の相関がある傾向が見られた ($r=.15, p<.10$)。

考 察

感情共有の期待感を測定するため本研究で用いた 10 項目には高い内的整合性が確認された。今後、この項目によって測定されたものが、コミュニケーションの際の送り手の感情表出を予測するか実証的に検討し、項目の妥当性について検討する必要がある。

本研究では、他の測度との関連についても検討した。その結果、感情共有の期待感の程度と自尊感情の間には弱いながらも負の相関が認められた。この効果は想定していないものであったが、自尊感情が高いと、コミュニケーションの受け手は自分の感情を共有できないと感じる可能性もある。感情共有の期待感と他者の内面への関心、また他者に対して空想する程度には関連が見られなかった。他者の外面的特徴への関心とは関連がある傾向が見られた。送り手は受け手の服装などから共通性を類推し、感情共有を期待する可能性もある。ただし、本研究で見られたこれらの相関は非常に弱いものであり、再度検討が必要である。

本研究の一部は JSPS 科研費 JP18K03017 の助成を受けた。